



館長だより

山形県産業科学館

令和 7 年 1 1 月 2 0 日 (木)

発行 館長 加 藤 智 一

奥出雲のたたら製鉄

「奥出雲」とは、島根県仁多郡奥出雲町を指すようですが、歴史的、文化的意味あいでは、雲南市（旧吉田村など）や飯南町の一部も含めて「奥出雲」と呼ばれることがあります。特に「たたら製鉄」や「神話の舞台」としては、斐伊川上流域一帯も含むようです。

「奥出雲」の製鉄は、日本古来の「たたら製鉄」によって千年以上続いてきた伝統技術です。日本刀の材料「玉鋼」を生み出す重要な産業でした。歴史は古く神話の時代。「古事記」や「日本書紀」に登場するヤマタノオロチ退治の話は、「奥出雲」の斐伊川上流が舞台でした。スサノオノミコトが降り立った地として、そして古代から鉄の産地として、「奥出雲」の重要性は語られてきました。

約 1400 年の歴史を持つ日本独自の製鉄法である「たたら製鉄」ですが、原料は真砂鉄と木炭です。これを粘土製の炉で高温を維持しながら、三昼夜かけて鉄を精錬します。一度の操業（「一代」）で約 12 トンの砂鉄と 13 トンの木炭を使い、約 3 トンの鉄塊（鋳）を生産したそうです。ですから「奥出雲」が「たたら製鉄」の地に選ばれた理由は、地質的に花崗岩が広く分布し、良質な砂鉄が豊富だったこと、広大な森林により木炭の供給が可能であったことがあげられます。これらの条件が揃い、江戸後期から明治初期には国内鉄生産の約 8 割を担う一大産地となりました。現在も奥出雲町には、世界唯一操業中のたたら炉「日刀保たたら」が存在し、生産した玉鋼は全国の刀匠へ供給されています。

そんな、古代から日本を代表する工業地帯であった「奥出雲」の現在の姿はどうなのでしょう。それが何と今日では、美しい棚田として蘇っているのです。砂鉄を採取するために山を切り崩した場所は、放置されることなく農地へと再生され、現在は「仁多米」などのブランド米を生み出す基盤となっています。砂鉄を採取するために用いられた「鉄穴流し（かなながし）」という技法は、山を切り崩し水流で砂鉄を選鉱する大規模な作業であり、自然環境に大きな影響を与えました。しかし、先人たちはその跡地を荒廃させることなく、棚田として再生させたのです。この棚田は「大原新田」などに代表され、江戸時代から続く景観を今に伝えています。「鉄穴流し」で削られた山腹が整然とした段々畑に姿を変え、今日では農林水産省の「日本の棚田百選」にも選ば

れるほどの美しさを誇ります。ここで育まれる「仁多米」は、全国的に知られるブランド米であり、かつての鉄の大地が今は豊かな食の源泉となっています。さらに注目すべきは、たたら製鉄が単なる自然破壊ではなく、循環的な資源利用を伴っていた点です。森林は無秩序に伐採されることなく、約 30 年周期で輪伐され、持続可能な形で木炭を供給しました。その結果、棚田やため池、草原といった二次的自然が形成され、今日では多様な生物が生息する豊かな生態系が保たれています。このように、奥出雲の文化的景観は「人と自然の共生」の証であり、平成 26 年には「奥出雲たたら製鉄及び棚田の文化的景観」として国の重要文化的景観に選定されました。

「産業跡地の再生」という視点からみれば、栃木県の足尾銅山も、かつて深刻な公害を引き起こした鉱山ですが、現在では植林活動が進み、環境再生の象徴となっていますし、愛媛県の別子銅山は、現在「マイントピア別子」として観光施設に生まれ変わり、産業遺産を学ぶ場となっています。また、島根県の石見銀山は、世界遺産に登録され、鉱山跡地が歴史的景観として保存され、観光資源へと転換されています。これらの事例は、かつての鉱山や工業地が「負の遺産」として終わるのではなく、教育・観光・農業・環境保全といった新しい価値を持つ場へと再生されていることを示していますが、「奥出雲」の棚田は、砂鉄採取跡地が農業基盤へと蘇った稀有な例であり、産業と自然の循環的共生を体現しています。かつて鉄を生み出した大地が、今は米を育み、人々の暮らしを支える場となっているのです。このような歴史の重層性は、単なる景観美を超え、未来に向けた「持続可能な社会」のヒントを与えてくれるものではないでしょうか。そう考えると、東日本大震災で甚大な被害が発生した「東京電力福島第一原子力発電所（福島第一原発）」および立地している福島県双葉郡大熊町および双葉町は、100 年後 200 年後どのように変容しているのか、興味深いところがあります。

